The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	萩原朔太郎　イデーとしての日本
Author(s)	松村，寛之
Citation	大阪大学，2005，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45721
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【10】

氏　　名	松　村　寛　之（まつむら ひろゆき）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１９１２２　号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	**萩原朔太郎　イデーとしての日本**
論文審査委員	（主査） 教　授　猪飼　隆明 （副査） 教　授　出原　隆俊　　教　授　村田　路人

論文内容の要旨

本論文は、日本におけるネイション構築をめぐる問題を、詩人萩原朔太郎の思想的軌跡のもつ複雑さの解明によって明らかにすることをめざしている。萩原朔太郎は、1937 年 12 月に「日本への回帰」を書き上げた後、次第に国粋的な言動に傾き、戦争協力的ともとれる姿勢を示す。昭和 10 年代には「日本浪漫派」の同人として活躍し、日本軍の南京陥落を賛美する詩を書くなど、時代の流れに押し流されていったようにみえる。しかし、彼のナショナリズムははたして国家に「回収」されたのかどうか、彼の中には日本近代が求めて得られなかった「想像の共同体」への熱望とその敗北が横たわっているのではないか、このことを具体的に吟味しようというのである。本論文は、すべて書き下ろしで、400 字原稿用紙およそ 350 枚のものである。

まず第一章において、「口語自由詩の完成者」と評される萩原朔太郎が、「郷土望景詩」（1925 年）を文語漢文調でうたっていることの意味を問うて、朔太郎が故郷（群馬県前橋）にたいする感慨、激しい疎外感からくる「復讐」なる感慨を表現するには、この文語漢文調以外にないとの認識に基づいていることを指摘する。朔太郎によれば、音律を欠いている日本語は、ホメロス以来西洋文明の根底を支えるヒューマニズムの精神であり、個人主義と強靭な主観によって現実を超克しようとする意志としての「叙事詩的精神」を表現するには適さないという。この精神を自らの言語で表現できないことは、朔太郎にとって深刻な問題であった。なぜなら、近代日本のネイションを「民族詩」としてうたうことは「叙事詩的精神」を表明することにほかならないからであったという。

第二章では、朔太郎がなぜ叙事詩的精神と、それによる「民族詩」を求めねばならなかったのかという問題を、彼の若き日における思想形成の過程から考察する。明治期に、政府主導の国民化、「臣民」の訓育が行われたが、日清・日露戦争を経過して個我が析出されるに及び、上からの画一的な統合にくさびが打ち込まれる。朔太郎も、立身出世主義から脱落した、煩悶青年の典型的な一人であったが、にもかかわらず、自らを近代人と自負し、個人主義による旧道徳の破壊を夢見るようになる。しかし、朔太郎は現実に対する叛逆をうちに秘めながらも、無能な脱落者という劣等感や、それゆえ故郷の人々に対する過剰なまでの疎外感にさいなまれ、みずから「疾患」とよぶ孤独に閉じこもるが、日本社会から疎外され、見捨てられた詩人は、美の世界においてナショナリティーの伝統と一体化できる、したがってこの点でも朔太郎は時代精神と近いところに生きていると指摘する。

第３章および終章では、朔太郎のナショナリズム思想が、十五年戦争期において国家による国民統合と対立し、そして敗北していく姿が描かれる。朔太郎は、叙事詩的な情操を日本語で表現する試みは、本来的に不毛だとの認識を

深めることで、昭和の詩人とは、この叙事詩的精神を狭義の詩においてではなく、むしろ「詩文学」、すなわちその本質に「詩精神」を有する、あらゆる種類の文学に表現する人びとでなければならぬ、との認識にいたる。とともに、三木清が川上徹太郎との論争の中でみせたように、伝統と近代を切り離すのではなく、むしろ伝統そのものに内在する近代への可能性を求めるようになる。ときあたかも多くの知識人や文学者が、回帰すべきものとしてネイションの模索に向かいはじめていた時であったが、朔太郎の「イデーとしての日本」の模索は、これらの回帰とは一線を画していたという。彼にとって伝統とは、回帰すべき原像、普遍の規範とみなすのではなく、自らの内側から常に新しい時代を指し示すような芸術の絶え間ない流れ、永遠の生成と変化の中に止揚する理念であったとする。この朔太郎の伝統認識は、「個」の抑圧と支配のために国家が掲げた伝統の姿とは明らかに対立するもの、むしろ抵抗の武器とも言えるものであった。戦争の進行の中で、朔太郎の芸術至上主義的姿勢は頽落していくけれども、彼のネイションと、その核になる伝統の批判的創造は、死に至るまで維持され、戦後の、例えば竹内好のような思想家に受け継がれたと言う。

論文審査の結果の要旨

本論文は、詩人萩原朔太郎の詩と膨大な評論等に示される思想や文学論、あるいは社会認識の展開の軌跡を、近代日本が本来的にまた歴史の進行の中で抱え込まざるを得なかった矛盾とのかかわりにおいて明らかにしようとした意欲的な作品である。朔太郎における、故郷からの激しい疎外感、自ら「疾患」とよぶ孤独感と異常な精神的体験の析出は、家族国家観＝国家有機体説によって異質な存在を拒む国家や郷党社会と彼との距離を確認させ、叙事詩的精神＝ヒューマニティを基礎に描くナショナリティが、表層では偏執にみえながらかえって健全な本質をもつものであることを明らかにしえた。十五年戦争期に多くの知識人が国家の戦争政策に絡めとられ（回収され）ていくとき、朔太郎の模索する「イデーとしての日本」が彼らと一線を画するとの指摘も、説得的である。日本語論を伝統と近代的精神との関係で論じたのも、朔太郎の精神的・思想的特質を論じるのに説得性を与えている。朔太郎の作品を論ずるに際して、その作成時と発表時との時間差への考慮不足がみられたり、他の知識人や作家群との比較にもの足りなさを感じさせたり、あるいは朔太郎への思い入れが分析の甘さを生んでいると感じさせる部分があるが、全体を通しての緊張感の充溢した分析は、本論文が十分に博士（文学）の学位の水準に達していることを示している。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものであると認定する。